

東チモール支援先の活動報告



国の基礎情報

1. 面積

約1万4,900平方キロメートル（東京、千葉、埼玉、神奈川の合計面積とほぼ同じ）

2. 人口 約130万人（出典：世界銀行2021年報告書）

3. 首都 ディリ

4. 民族

メラネシア系とパプア系

その他マレー系、中華系等、ポルトガル系を主体とする欧州系及びその混血等

5. 言語

公用語は、テトゥン語及びポルトガル語。実用語に、インドネシア語及び英語。

その他30以上の地方言語が使用されている。

6. 宗教 キリシト教99.1%（大半がカトリック）、イスラム教0.79%

運営母体：聖マリア修道女会(ODN)

- ▶ ご縁はバツタンバン友の会の時代から
- ▶ 東チモールでのプロジェクトについてご相談を頂き、本当に貧しい地域の子供達への教育支援という活動理念が、我々の会の趣旨にも合致
- ▶ 2020年5月にUS \$ 7,400の支援を実施
- ▶ パンデミックによる渡航制限も緩和され、今年の1月からシスター5名も現地に着任、プロジェクトがスタート！

東チモールでODNの活動

とても貧しい地域・教育が行き届かない場所での活動

マカダデという山間部は、電気も水道も通っていない（太陽光パネルのみ）

学校も小学校しかなく、毎日2時間の授業しかない

渡航制限によりチャーター便でしか渡航できないなどの困難の中、シスター達も途中でコロナ感染と隔離などに見舞われながら、2022年の1月からようやく5名のシスターが現地着任。

子供たち、青年達への教育、大人向けの就業支援のための外国語学習など、山間部と平地（ベロイ）にて精力的に活動を展開。

子供達の医療へのアクセスも支援。

シスター方の活動

- ▶ Sr. Conchis (スペイン)リーダー
- ▶ Sr. FIDE(DRCコンゴ)フランス語
- ▶ Sr. AILEEN(フィリピン)英語
- ▶ Sr. Euphemie(ブルンジ出身)ポルトガル語
- ▶ Sr. Norah(ケニア)看護師、英語とスペイン語



シスターの家に到着



自家発電機 ソーラーパネル



マカダデにて



レオニータとその家族

大きな土地をシスター達の活動のために無償で提供すると申し出てくれた

50M×150M

小学校からも近い土地

マカダデの子供たち



小さい子たちの面倒を見ながら
絵を描いています



色鉛筆を取り合って
シスターに怒られた！





アタウロ等にあるもの（大自然）を描いて見せてくれました。

シスター達の家庭訪問



病気や障害のある子供達を街のクリニックや首都の病院まで連れて行く等の活動も

親も医療機関へのアクセスがないので手遅れになることもあり、家庭訪問が重要

アタウロ島の街（ビラ）訪問



シスターアイリーンと、オート三輪(TUKTUK)にて

とても暑く
道がガタガタです

日が沈むとこのメイン通り
も真っ暗になります



炎天下のなか、はるばる
街まで山のものを売り
に行く世界中のお母さ
ん達はたくましいです

ビラの子供たち



手工芸品を作るNGO (Vila)



最終日 ドラゴンボートでディリへ



子供たちは耳の病気も
多いとのこと

今後の活動

1. ベロイでの語学教室をもう少し本格的にやりたい

(1) 教室がない（シスターの家と庭とチャペルの横の建物間借り）

→活動拠点も賃貸なので、建て増しできない（土地については交渉中）

(2) 非常に暑い

平日は正午から1800まで、週末は正午から翌朝まで電気なし

(3) 教材もない、机も椅子もない、黒板も小さなものしかない

簡易的な建物で、暑さもしのげるものを設置できないか

教材は金銭的な部分に加え、そもそも国内調達が難しいので周辺国から調達してお送りするなども検討できないか



今後の活動（続）

2. 山村マカダデにてより中長期的な活動を行う拠点ができれば
（コミュニティーセンターやより教育施設）

山の人々はとても歓迎してくれていて、二週間に1度くらいは出かけた
たい。日帰りは難しいので、泊りがけで数名のシスターが交替で行く
（現在は、山の教会の隣の施設＝青い建物で、子供達の教育と宿泊）

山の長老のご案内で2つの土地の案内を受けている

- ①今の山での活動場所（青い建物）から近い25mX25mという小さな場所
- ②少し離れるが平地で大きな土地50mX150m(小学校から近く、道路にも近い)

中学校が作られるかは行政にも計画を尋ねているところ
先生になれる人の教育も必要

今後の活動（続）

3. 山での活動に加え町（ビラ）での活動も

マカダデまでは車で2時間（ものすごい山道）

車を借りなければ5～6時間かけて歩く

車でも荷台、翌日は体中が痛む。

Vilaで夜の語学教室も始めてほしいと要望。

日が沈んだ後は道も真っ暗

もっと各地域の子供達に頻繁に会いに行き、活動を進めたいが、交通手段が限られている。



歴史

外務省HP「わかる！国際情勢」

21世紀初の独立国、東チモールの現状と課題、を基に作成

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol36/index.html>

ポルトガル支配、日本による占領 インドネシア侵攻

- ▶ 「リウライ」と呼ばれる王たちが割拠する王国だったティモール島。大航海時代の16世紀前半、宣教師とともに、「白檀」（びゃくだん）を求めて来航したポルトガルが、ティモール島を征服して植民地化。
- ▶ 17世紀半ば、インドネシアを植民地支配していたオランダがティモール島の西半分を占領し、リスボン条約（1859年）によってティモール島は東西に分割。ティモール全島は1942年日本軍が占領、戦後は1945年に西ティモールがインドネシアの一部として独立するも、東ティモールでは再びポルトガルによる支配が復活。
- ▶ ポルトガルは1974年、国内で発生した政治クーデターによる政権の崩壊で、東ティモールの植民地支配を放棄。これを機に、東ティモールでは独立に向けた機運が高まり、1975年には独立派勢力「フレテリン」（東ティモール独立革命戦線）が独立を宣言。その直後にインドネシアが東ティモールに軍事侵攻。1976年に「27番目の州」として併合を宣言。その後、東ティモールではインドネシア政府による社会基盤整備や学校教育などが開始。

スハルト政権崩壊、サンタクルス事件から分離・独立へ

- ▶ 1991年、首都ディリのサンタクルス墓地で、ある青年の葬儀をきっかけに起きた独立派の抗議集会にインドネシア軍が介入、多数の住民が殺害（サンタクルス事件）。国際社会ではインドネシアの人権侵害を強く非難する声が強くなり、東ティモールの独立運動は本格化。
- ▶ インドネシア・スハルト政権の崩壊（1998年）により、新たに就任したハビビ大統領（当時）は、東ティモールの自治・独立を容認する方針に転換。1999年、東ティモールで独立の是非を問う住民投票が実施され、住民の約8割が「分離・独立」を選択。

国連多国籍軍派遣、暫定行政機構 →独立へ

- ▶ 住民投票の直後から、独立反対派勢力による破壊・暴力行為が激化し、急速に治安が悪化。建物やインフラなどが破壊され、多くの死傷者。
- ▶ 国連安全保障理事会は多国籍軍の派遣を決定、国連東ティモール暫定行政機構（UNTAET）というPKOを設立し治安回復と復興支援に乗り出す。
- ▶ 大統領選挙や国連東ティモール支援団（UNMISSET）の設置などを経て、2002年5月20日に独立を達成。
- ▶ 東ティモールは21世紀最初の独立国家として、新たに歩み始めました

更なる混乱から国づくりへ

- ▶ 2006年、西部出身の国軍兵士が、東部出身の兵士に比べて差別待遇を受けているとデモで訴えていたところ、この機に乗じ、政府に不満を持つ若者らが中心となって、ディリ各地で暴動。
- ▶ 国軍を離脱した憲兵隊員による国連本部襲撃、武器の一般市民への流出、国軍兵士による国家警察（PNTL）警察官射殺事件を契機とするディリのPNTL崩壊。
- ▶ 治安の悪化を恐れて、一時は15万人もの住民らが国内避難民となる。この事態を受け、豪州やポルトガルなどは東ティモールの要請で国際治安部隊を派遣。国連安保理は、2005年4月から行っていた統治事務所を通じた国連の関与の仕方を見直し、国連東ティモール統合ミッション（[UNMIT](#)）というPKOを設置、治安維持やガバナンス強化などを支援。
- ▶ 国際治安部隊とUNMITの展開によって治安は一定程度回復し、2007年には東ティモール政府が初めて実施主体となる大統領選挙と国民議会選挙を実施。
- ▶ 2008年2月、大統領と首相が武装勢力に襲撃され、大統領が重傷を負う事件が発生。これを機に再び治安が悪化するのではないかと懸念が広がり、非常事態宣言が発出されたが治安は保たれ、現在は平穏が維持されている。
- ▶ 東ティモール政府は、本格的な国づくりに取り組もうとしています。